

# WORKS\_HOP



Title

---

## KANBUTU KANSOU

### 「レンジを捨て、外へでよ」

乾かしながら歩くための  
ポータブル・スカルプチャー

Artist

---

## 山本麻世

# KANBUTU KANSOU 「レンジを捨て、外へでよ」

## 乾かしながら歩くためのポータブル・スカルプチャー

### ワークショップ

外は窯またはレンジ。

風と日光は、ものを劣化させることもあるけれど、同時に、栄養や旨味を生み出すこともある。

里山から街へ、大根はかつて水路を使って運ばれていた。

けれど、その水路の多くは今、暗渠になっている。

では今、私たちはどうやって作物や作品を運ぶのだろうか。車や電車以外で。

このワークショップでは、大根やにんじん、さつまいもなどを、ただ干すのではなく、**身体で運びながら乾燥させるためのバッグ**を作る。

洗濯ネットや石けんネット、針金、紐、ゴムなど、身近な材料を使って、風が通り、日光が当たり、歩きながら乾いていく「乾燥バッグ」を制作する。

それはバッグでもあり、道具でもあり、非常食を作る装置でもあり、身につける彫刻でもある。

## 内容

参加者はまず、洗濯ネットや網状の素材を使って、野菜を入れるための袋状の作品を作ります。そこに細く切った大根や野菜を入れ、身体に下げたり、持ったり、背負ったりできる形にしていきます。

その後、外を歩きます。歩くことで身体を使い、風に当たり、日光を浴び、野菜は少しずつ乾いていきます。

車や電車で運べば早いけれど、あえて歩く。歩くことで、身体も丈夫になり、野菜も乾き、いつの間にか切り干し大根のような乾物ができていく。

レンジでチンするように、外を歩くだけで変化が起こる。自然は遠くにあるものではなく、都市の中の風、日差し、ベランダ、洗濯物の乾き方の中にもある。

## テーマ

- ・乾燥すること
- ・歩くこと
- ・運ぶこと
- ・軽くなること
- ・栄養を作ること
- ・身体を使うこと
- ・作品と食べ物のあいだ
- ・道具と彫刻のあいだ
- ・自然と都市のあいだ

## 材料

### 外側の材料

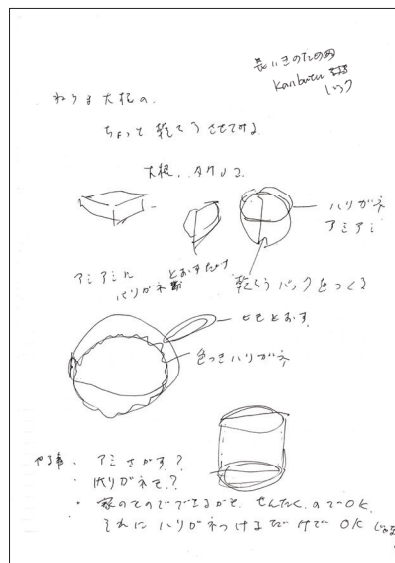
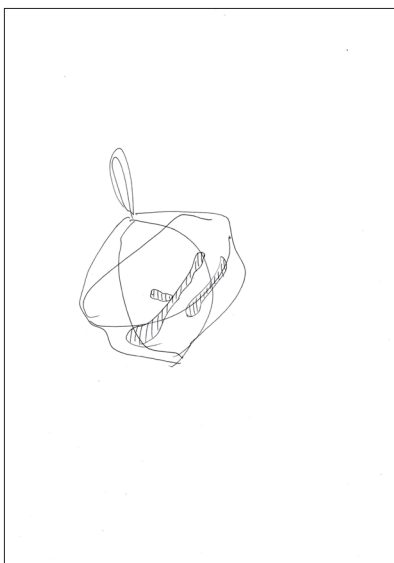
- ・洗濯ネット
- ・石けんネット
- ・網
- ・色付き針金
- ・紐
- ・ゴム
- ・モール
- ・クリップ
- ・網戸を留める部品
- ・結束バンドなど

### 中身の材料

- ・大根
- ・にんじん
- ・さつまいも
- ・その他、乾かしてみたい野菜

|              |                                                                                                                                                                                                                                   |
|--------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1   はじめの話    | 切り干し大根、乾物、暗渠、里山から街への移動、洗濯物、日光、風、栄養、子育てとサプリ、歩育、大原女などを入り口に、「乾くこと」と「運ぶこと」について話す。                                                                                                                                                     |
| 2   野菜を切る    | 大根や野菜を、細く切る。<br>ここでは台所で行うカービングとモデリングを行き来するように、食材を彫刻の素材として見てみる。<br>陶芸のように、中空や空気の通り道を意識しながら、どうしたらよく乾くか、どうしたら軽くなるかを考える。                                                                                                              |
| 3   乾燥バッグを作る | 洗濯ネットや石けんネットに、針金や紐を通して、野菜を入れられるバッグを作る。<br>風が通ること。<br>日光が当たること。<br>持ち運べること。<br>身体にぶら下げられること。<br>機能だけでなく、形や色、揺れ方も見ながら作る。                                                                                                            |
| 4   野菜を入れる   | 切った野菜をバッグの中に入れる。<br>入れた瞬間に、重さが生まれる。<br>大原女のように、何かを運ぶ身体のこと考える。<br>重たいものを、どう持つか。<br>どう軽くしていくか。<br>どう乾かしていくか。                                                                                                                        |
| 5   外を歩く     | 完成した乾燥バッグを持って、外を歩く。<br>日光に当てる。<br>風に当てる。<br>身体を使う。<br>歩くことで、作品も、野菜も、自分の身体も少しずつ変わっていく。                                                                                                                                             |
| 6   観察・共有    | 歩いたあと、野菜の状態を見る。<br>・少し乾いたか<br>・色は変わったか<br>・匂いは変わったか<br>・重さは変わったか<br>・バッグは使いやすかったか<br>・これは食べ物なのか、作品なのか<br>最後に、できたものを並べて見る。<br>必要であれば、乾燥の続きを家のベランダや窓辺で行う。<br>たぶん、その時あまり変化は見られないかもしれない。<br>後日インスタで時間の力をかりて<br>どんな乾燥姿になったかを共有できたら嬉しい。 |

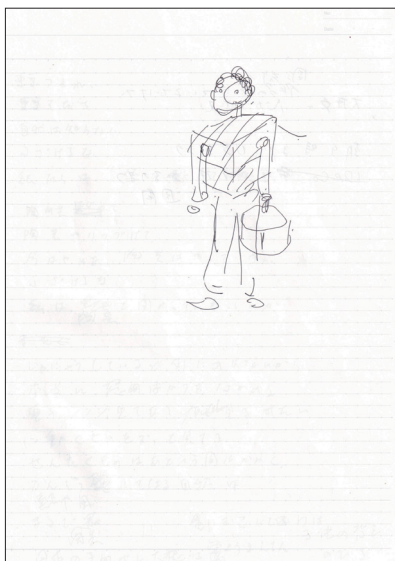
### 3 | 乾燥バッグを作る

[illegible]

## 4 | 野菜を入れる



## ドローイング



## 動画



QR

ワークショップの様子

## 5 | 外を歩く



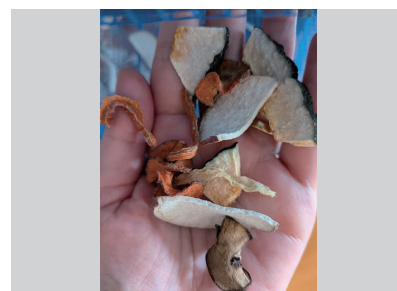
### 動画



QR

ワークショップの様子

## 6 | 観察・共有



---

## 作品としての 説明文

《KANBUTU KANSOU》は、野菜を乾かしながら歩くためのポータブル・スカルプチャーを作るワークショップです。

切り干し大根は、乾燥によって軽くなり、長く保存でき、栄養や旨味も増していきます。

この「乾く」という変化を、台所の中だけではなく、身体と外の環境を使って行います。

かつて水路を使って里山から街へ作物が運ばれていたように、参加者は自分で作った乾燥バッグを持って歩きます。

風、日光、重力、揺れ、身体の動き。

それらの力を借りながら、野菜は少しずつ乾いていきます。

誰かの力を借りて作品を作る。

何者かの力を借りて生きる。

このワークショップでは、自然や身体や生活の力を借りながら、作品を作ります。

乾燥は引き算である。

彫刻も引き算である。

重たいものを軽くし、複雑なものを単純にしながら、生活の中にある彫刻を探していきます。

---

## キャッチコピー案

**外は窯。歩くと乾く。乾くと軽くなる。**

または、

**大根を持って歩く。いつの間にか、切り干し彫刻ができている。**

または、

**乾物を作るためのバッグ。 生きるためのポータブル・スカルプチャー。**

---

## 少し短い告知文

大根や野菜を、身体で運びながら乾かすためのバッグを作ります。

洗濯ネットや針金、紐などを使って、風が通るポータブルな乾燥バッグを制作し、実際に外を歩きます。

歩くこと、干すこと、運ぶこと、食べること。

そして、作品を作ること。

外の風や日光の力を借りながら、生活の中にある彫刻を探すワークショップです。

重たいものを軽くする。

栄養を持ち運ぶ。

乾燥という引き算(栄養としては足し算)から、作品を考えてみます。

## 制作ノート

### 覚え書き(音声入力)

0.

KANBUTU KANSOU 外は窯かレンジ

里山から都心に大根は水路を使って運ばれる。でも水路は今全部暗渠。車乗って運ぶなら歩いて体と外を使って、とても健康。そして、京橋に着く頃には、、、大根を乾燥させながら歩いてみる。着いたら、売るか食べればいい。いつの間にか栄養満タンの切り干しができている。乾燥するためのバッグを作る。あみあみに針金を通すだけ。

やること：洗濯に使う網でOKそれに針金をつけるだけでOK長生きのための乾燥バック

材料：イングリディエンス 色付きの針金 紐 洗濯ネット

誰かの力を借りて 作品を作る 生きる 何者かの力を借りて 作品を作る 生きる。子育てをしていると何かとても栄養があるよなんて聞いたら、当然いつも不安だからすぐに飛びついてしまうよね。でも結局サプリもビタミンDが必要とか言われたりして、なんだそんなものは散歩すれば日光浴すれば取れるじゃないか。今まで通りの生活でいいんじゃないかと逆戻りすることがよくある。中年になると運動である程度のことは解決するのかなと どんどん単純になっていく。カルシウムだって 切り干し大根で取れるんだって。スーパーからなんであんな重たい思いをして牛乳を買ってきたたのか。って本当にダンベルだった。軽い方へ 軽い方へ 単純な方へ 単純な方へ 乾物を持ち運び、作るためのポータブルバッグ。彫刻は引き算？

東京生まれ東京育ち 自然は知らない？ ふざけるな、私たちは自然を感じていないのか。陶芸を初めて 陶芸をやりに続けて今はやめた。今は陶芸 はやっていない？ ふざけるな 私は陶芸と関わっていないのか。授乳していると外に出られないから本当に窓ばかりを眺めながら。電子レンジを見ていたり、YouTubeを見るみたいにベランダの動くものをずっと見てると洗濯物はあつという間に乾く。乾燥、気にもなる。自然はまるで窯。陶芸の窯みたいに乾燥機にもなる 切り干し大根は栄養満点。買い置きしておけば 子供の背も伸びる。非常食にもなる。

大根河岸。里山から街へ運ぶ 美術作品も同じ。できた作物、作品をもっていく。その動き方 昔は水路を使っていたのを今は陸路で動かす、電車も車も今はあるけど、歩きたい。歩育って歩くと身体も丈夫になるっていうし、この動く、歩くという作業でいつの間にかレンチンみたいにできちゃうもの。風化と日光は劣化につながる。反対に栄養にもつながる。旨味にも、ジャコメッティにもつながる。私なりの生活の中のジャコメッティを突き詰める

方法をためしていく。

台所でカービングとモデリングを行ったり来たりしながら、乾かすための彫刻。ポータブルスカルプチャー、ベランダスカルプチャー

イングリディエンス 外側 もーる、針金、ゴム各種、網戸とめるもの、洗濯ネット、石鹸ネット 中身 大根、さつまいも、にんじん

陶芸やってたから、中空が当たり前でマッシブなものを疑う癖がついてしまっている。

中村直人(なかむらなおんど)の大原女(おはらめ) 木彫作品をギャラリー川船でよく見ていた 大原女は本当にいつも見るたびに辛くなる。あんなに重いものを頭にのっけてどうするんだ。本当にっ！て、すごい可愛いながらもこの頭に乗ってる重たいもんは何かならないものかと毎回感じる。

### 覚え書き 1

美術ってプロセスみせるっていう作品も多い、それらに魅力をみる。

キャンバスの上での変化を見せる作品、脳内丸裸でそれを覗いている。

家に帰るまでが遠足ですって、毎回毎回遠足の度に言われてたのに、大人になったらすっかりそのことは忘れている。

家に帰るまでが作品です。乾かし切るまでが作品です。食べるまでが作品です。消化するまでが作品です。

### 覚え書き 2

メッセージでのやり取り

10:02 (月)

吉川さんにもグルグル回ってるあいだ乾物を腰に下げといてもらうかねw

13:23

今朝、気付いたんだけど、、、バックって言ってるけどさ、、、結局さ、、、人にパラサイトしているんだよね、この作品 ワークショップ

東間さんが吉川さんにもグルグル回って腰に付けて乾かしてもらうかね、っとメッセがきてその日は一日多摩美の非常勤講師をしていたからバタバタして終わっていった。次の朝起きるときに、自分のワークショップを俯瞰して残存を思い出して文章書かないとなああとぼんやりしていた。朝ごはんは自動的に動けば大丈夫だし、食材は届いていたのでさぼどの心配もせずにゆっくり置

きながら大好きなコーヒーの準備をしようとしたけど、早く書き留めないといけないいつものノートを開く。そうじゃないと一日中そのこと考えてしまうから、頭の掃除を朝はしないとなんない。

ノートにはこう書いてあった。

「結局、二週間くらい経ってこのワークショップを考えて朝起きたとき、人間という構造体に作品をパラサイトさせていることに気づいてぞっとする」

娘が産んだときも、「肉片に目玉がついてて驚いた」と友人に言ったら、その友達が驚いてた。なんでだか分からなかったけど、自分が人を素材として見ちゃっているときがあるのは確かだ。環境もそうだったけど、人もそうなんだよね。

授業でボディエクステンションという課題をつくって悪戦苦闘している学生さんたちを観ながら、今の自分のことにも関係してきていることに、

どうしたらいいのかと。

仕事も生活、出産もミングルミングルになる

#### 覚え書き 6

2026年6月12日

5月に、練馬区でワークショップを行った。美術関係ではない方々との仕事は、思っていた以上に商業的で、何事もスピード感があった。判断も進行も早く、こちらもその流れに合わせて動いていくような感覚があった。その後、今回のワークショップのお話をいただいた。そのときに、今度はもう少し違う速度で、地域の歴史や生活の跡に触れながら、ワークショップをやってみたいと思った。

最近、近所の文化財を見ていると、たとえば漬物石で作られた石垣や、生活の中で別の役割を与えられたものたちに、とても惹かれる。本来の用途から少しずれて使われているもの。でも、そのずれの中にこそ、生活がここに本当にあったのだという実感が残っている。

練馬大根が本当にこの土地の大切な産物だったのだということも、そうした痕跡からじんわりと漂ってくる。

ギャラリー川船に行くとき、有楽町線に乗りながら、練馬から運ばれていった大根のことを思う。銀座には、大根河岸の石垣の跡がある。そこを見るたびに、ここまで練馬から大根が運ばれてきたのだと思う。

作品もまた、大根と同じように、練馬で作られ、別の場所へ運ばれていくのだろうか。

仏教の伝来とともに、日本には多くのものが運ばれてき

た。仏像や経典のような大きなものだけでなく、誕生仏とか小さく包まれ、忍ばされ、携えられたものたちもあったのではないと思う。平戸に行った時みたジャガタラ文みたいな。「忍ばせる」ことや「ポータブル」であることは、重要な何かを運んでくれる気がしている。

また、仏像が美術館に運ばれるとき、魂を抜く、あるいはお札を抜くという話も気になっている。美術館に入るために、信仰の対象から美術作品へと変わる。そのとき、何が抜かれ、何が残るのだろうか。

今回、野菜を作品の中に入れていくことは、逆に、そこに魂を入れることになるのだろうか。食べられるもの、運ばれるもの、生活、移動と作品のあり方について考えてみたい。

#### 覚え書き 7

コンポストからの土をただ植木鉢に入れておいたら、かぼちゃやナス、ゴーヤがわんさか生えてきた。種の威力を知り、土に混ざって見えなくなるほど小さいからできる技なんだと場所と時を超える存在におどろく。そんなものに憧れる。

## Profile



山本麻世 | Asayo Yamamoto

1980年東京生まれ。多摩美術大学美術学部工芸学科陶コース、同大学大学院を修了後、オランダ・アムステルダムへのリット・リートフェルト・アカデミー陶芸学科、サンクトベルグ・インスティテュート・ファインアート学科で学ぶ。陶芸を出発点としながら、現在は彫刻、インスタレーション、ワークショップなどを通じた制作を行っている。国内外のアーティスト・イン・レジデンスに多数参加。六甲ミーツ・アート、越後妻有トリエンナーレなどで発表するほか、個展に「川底でひるね」「母乳で育てた？それともミルク？」(ギャラリー川船)、「イエティのまつ毛」「だいだらぼっちの毛づくろい」(ナミイタ-Nami Ita)、「交わると、生まれます」(スプラウト・キュレーション)など。スプラウト・キュレーションによる「Unrecognized Creature」「A Happy New World 2021」「風とイメージ」、CADAN有楽町での「LESS THAN NATURE」など、現代美術の展示を中心に発表を重ねている。